
俺の無意義な異世界雑務

紅崎赤彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の無意義な異世界雑務

【Nコード】

N2496J

【作者名】

紅崎赤彦

【あらすじ】

多重世界公社。それはトップに創造神を据えた。銀河規模の管理団体。主人公はその統括局に所属するヒラ職員。多くの雑務をこなすそんな彼のお話。

「ちよっとそこの異世界から『ドラゴンのカルパッチョ、イタリアン風味』ていうの買ってきて」

「もうそれ、雑務じゃなくてパシリだろ」

いわゆる異世界モノ、でも召喚モノではありません。上にも書き

ましたが、世界の管理団体という規模のでかいものが出てきます。
そういうのが嫌いな人はご注意ください。
主人公最強モノかどうかは微妙です。

第一話（前書き）

大見「本編は43行目（空白含む）からだ」

第一話

小説、特にライトノベル（以下ラノベ）と呼ばれているものに、「異世界もの」「召喚もの」「転生もの」というジャンルが存在する。

これは主人公（あるいは主人公たち）が現実の知識や経験をもちつつ、ファンタジーの世界へ迷い込むものだ。

これにより読み手は主人公の行動や意志に違和感なく共感を抱きやすく、主人公の過去を深く掘り下げ、読み手の感情を引き込む必要がない。

さらにある程度、主に精神的な面で成長している状態でスタートなので、いわゆる成長期過程を長々と書き連ねる必要もない。

その上、主人公自体がイレギュラーな存在なため、いろいろなところでも設定を追加しやすいので修行期間をぐっと短縮できる。

いろいろと例外はあるが、以上の理由により「異世界もの」「召喚もの」「転生もの」というジャンルは普通のファンタジーものよりも書きやすく、親しみの持てるジャンルといえよう。

しかし、このジャンルにもいろいろな難点があり、作者にとって一番最初のそれは「主人公の人間関係」であろう。

主人公がどんな人間関係を持つのかは大抵の小説の場合、子供の頃からの人間関係が深く影響するのが定石である。

けれどもこれらのジャンルの主人公にはそれがない。友人どころか

親類すらいないのが基本だ。

これは主人公に自由自在な「人間関係」を組むことができるが、どうしてもストーリーで一番最初に組まれた「人間関係」に依存し過ぎてしまう傾向が生まれやすく、以降の主人公の「人間関係」が単調になってしまうのだ。

主人公のバッググラウンドをまっさらな状態からスタートできるのは利点でもあり、悩みどころでもあるのだ。

しかも最近ではこれらのジャンルのストーリー構成パターンは出尽くし感があり、読み手ではマンネリ感が漂い気味だ。

それらを払拭するには奇抜な世界設定、魅力あふれる登場人物で（読み手に）勝負するしかないだろう。

……ん？終わっただか？

悪かったな読者の諸君。こんなどうでもいい、読むだけ無駄な時間を過ごさせるような始まりかたで。

責任転嫁ではないが、これは作者の趣味であり、物語の中の俺らに

は一切関係のないことだ。

というわけで、ここから本編だ。

まずは自己紹介と行こう。自己紹介は重要だ。あの文章下手な作者がさらに下手をすると5話くらいまで主人公である俺のフルネームが出てこないかもしれないからな。

俺の名前は大見^{オオミ} 幸治^{コウジ}、21歳だ。

自分でも言うのは何だが、平凡な名前だと自負する。

それで今、俺がどこでなにをしているというのだな。

「やっぱり……この森って学校のじゃないよなあ」

お、いただいた。悪いな、話は後にさせてくれ。ちよっくら仕事を済ませてくる。

「おーい、その君」

「はい？」

うぬ。こいつ結構美形だぞ？別に野郎なんて興味はないが、TVをあまり見ない俺でもわかる。

こいつ、世に聞くジャーズ系ってやつだ。

おそらく高校生だろう。ブレザー着てるし。

「あ、警備員の人ですか？すみません、ちょっと道に迷っちゃったみたいで……」

うんうん。この反応ならまだ「接触」も「認識」もまだだな。にしても警備員って……。まあ、警察みたいな恰好だけだよ。この制服。

何はともあれ今回の仕事は楽に済ませられそう……。だ？

「ゲルル……」

「え？」

ああっと！振り向くな少年。

俺はとっさに少年の目を塞ぐように抱え込む。

「ちょっと何をするんですか!？」

いきなり見知らぬ人に抱き寄せられたらそりゃあ、もがくよな。俺だったら即殴るし。

「ちいーとばかり我慢してくれ」

俺は少年を逃がさないように適度に力を込めつつ、前方を見る。

そこにいるのは”狼”。ただし、体長は軽く6メートルはあり、眼は3つある。人間なんか一飲みできそうだ。

「……………」

明らかに常識ではありえない”狼”は3つの眼光を容赦なく叩きつけてくる。普通の人間、例えば腕の中にいる少年が真正面から受けたらまさに蛇に睨まれた蛙と化すだろうが、生憎と俺はそんなかわいいものではないのでね。

目標を”無影響”で保護したいし、”こっち”に痕跡を残すと始末書ものなので、少々面倒だがちょっと離れて”もらう”か。

「……………グル？」

逃げもしない俺達に”狼”は一步步近づくと。

しかし、脚は確実に前に進むために動いているのに距離自体は一向に近づかない。いや、むしろ離れている。

「ガウツ……………ガツ」

”狼”は脚を速める。しかし、それに合わせ俺達と離れる速度が

増す。

第3者の視点から見ればまるで”狼”がムーンウォークをしているように見えるだろう。4つ足で。

”狼”は必死に俺達に近づこうと走るフォームとなるが、さらに離れる速度が増すだけ。

後ろに進んでいるので尻から木に突進したりしている様子にはある種の憐みを感じる。いや、そうさせているのは俺なんだけどな。

そうして”狼”が完全に見えなくなるまで離れてから俺はいまだにもがいている少年を解放する。

「いきなり何をするんですか!? それになんか犬みたいな鳴き声が聞こえたけど何なんですか!？」

そうだった、眼は塞いだけど、耳は塞いでなかったな、失敗失敗。

「今野犬を追い払ったところだよ。君を捕まえていたのは野犬に下手な刺激を与えないためだ。礼を言って欲しいくらいだぞ？」

「……そうですか」

嘘である。あれを野犬というならば、おちおち森林浴もできない。日本はそんな危険な国じゃない。

少年はしぶしぶながら納得してくれた。たぶん、まだいきなり見知らぬ場所にいるショックから立ち直れていないんだな。

「ところでどこどこなんですか？」

案の定、少年は自分の所在を求めてきた。ここはマニュアル通りのテンプレでいくとしよう。

「ここは私有地だ。君は今不法侵入をしていることになる。俺が麓まで送り届けるから君の名前と家の電話番号をいいなさい」

「あ、はい。すみませんでした。僕の名前は……」

さて、長居は無用。とつとと帰還しますか。

俺は今、本部に戻っている。

今頃、少年は夢でも見たのかと思っていることだろう。

なんせ、俺に言われるがままついていったら、いつのまにか少年が本来いるべき場所。彼の学校で倒れているのだからな。

少年が今まで起きたことは夢であったという結論に至ってくれるこ

とを切に願う。まあ、そうなるように”して”あるから問題はないだろう。

「おう、ただいま」

「お疲れ様です。大見さん」

俺は本部の職員用出入口に設置してあるカードリーダーに自分の社員カードを読み込ませ。仕事内容と完遂時刻を記録しながら受付の坂上さんにあいさつをする。

「今日も被召喚者を”無影響”で保護したぜ。今月のトップは俺だな」

「相変わらず仕事が速いですね。大見さん」

ちと説明が遅れたが、ここは統括局の本部で俺の職場だ。

「オツカレさま。幸治君」

「ん？重^{シゲ}さんツスか。公社会議はもう終わったんですか？」

この気さくな中年……ゲフンゲフン、おっちゃんは……
もといオジサン……だめだ、俺の貧相な語彙じゃあ重さんのガラスのハートを傷つけない表現が思いつかん。まあ、いいや紳

士で、ちよび髭生やしてるし。これ採用。

とにかく、この紳士の名前は宝王寺ホウオウジ 重之シゲユキさんだ。俺にとっては恩人であり、たぶん一生、頭の上からない相手となるだろう。いつかあの恩を返せる日が来るといいな。

公社会議というのは俺が勤めている統括局含めた、多重世界公社全体の方針を決める幹部さまたちの会議だ。

それに出席している重さんかというと、ここ統括局の局長であらせられる。むっちゃ偉いです。

「総務局の坊っちゃんがまた駄々をこねてね。今日はもう解散だよ」
「はあ、またツスカ」

会社のはいくつかの局が存在する。ここ統括局もそうだし、各局は基本的に平等だ。

しかし、総務局はその名前と与えられている権利が他の局よりも多少優遇されている現状で、公社幹部候補生が多く集まる局だ。簡単に言うとエリート集団。高飛車なやつもそりゃあ多い。

しかも、総務局の局長はつい先月着任したばかりだ。自分が局長つてことをまだ自覚しきれていないんだろ。

ちなみに公社における局長というのはそんなに権力をもっているわけではない。気に入らないやつを勝手に転属させたり、減俸したりもできない。それを決めるのは局長ではない、公社のトップだ。

「しかし、またなんで社長さんはあんなのを局長なんかにしたんかな。俺にはわかりませんぜ」
「私にもわからんよ。でも、あの方のことだから何か見据えてのことなのだろう」

「見据えすぎて、節穴になってないといいツスがね」

多重世界公社社長は俺達公社職員にとっては絶対の存在。というか創造主、すべての世界と神々を作った偽りなし、本物の神様である。

まあ、会ったことはないけどな。ていうか存在が高次元過ぎて姿が認知ができないらしい。稀に総務局が社長の”言葉”を発表する時くらいしか俺達が社長を意識することはない。

”言葉”つーのはほとんどが人事についてのことが多い。月に一度は各局の人事が発表される。

「何はともあれ、ずいぶんと暇ができてしまった。久しぶりに飲みに行くかね？幸治君」

「いいツスね。いつもの店でいいつs……」

「おっと大見い〜。お前はこれから仕事だ」

「……ユツキー。今度はどんな面倒事持ってきてんスカ」

いきなり会話に乱入してきたのは花咲ハナサキ 雪路ユキミチ。通称ユツキー。名前こそかわいい印象がしないではないが、見た目は普通のマツチヨなおっさん。

他局から見れば、面倒見のいい人なんだが、統括局の職員からすればこれほど迷惑な人はいない。なんせ他局の面倒事を一気に引き受けてしまう人なのだ。

しかも、この人。副局長なんて立場なもんだからあんまり文句を言うわけにもいかない。

統括局に他局の追隨を許さないほど仕事があるのはこの人が一役買っているといっても過言ではない。

それ以外では本当に面倒見がよく新人研修の時でも大人気な人なんだけどなあ。

「そういうなよ、大見。これも人助けだと思って」

「毎回毎回、そのセリフ吐いてますツスよね」

「ははははは！ さて早速いつてもらうか」

「今からツスか！？ 今仕事から帰ってきたばかりなんスけど。ていつか、まだやるつていつてないs……」

「ほれ、これ指令書」

「ちよつと！ いくらなんでも横暴ツスよ！」

指令書は副局長以上の立場を持つ人が発行できる。簡潔にいうと

『お前この仕事頼むわ。拒否権はないよ〜ん』である。

無論、無条件で発行できるものではないが……。

「また有給減りますよ？」

「オレのことはかまわんから、はよ行け」

このおっさん、良くいえば欲がないんだよなあ。

「
……まあ、なんだね。がんばって、幸治君」
「
……はああ」

こうして、俺は不本意ながら再び仕事に行くことになってしまった。

俺の職場はここだが、活動場所はここじゃない。

異世界だ。

第一話（後書き）

冒頭はなんというか趣味です。ぶっちゃけ、これからは自重していきますので、どうかどうかご容赦をorz

誤字、脱字、説明がわけワカメという指摘があれば、どんどんください。出来得る限り修正します。

第二話

俺が所属している統括局はその名前の裏腹にやっているのは雑業ばかりだ。

故に他の局の幹部からは軽んじられる傾向があり、いろいろと面倒な仕事を押し付けられることもあり、とにかく仕事が多い。

おそらく職員数と仕事の量では統括局に並ぶ局はないだろう。

さて、そんなところの職員である俺に向けられた指令書の内容もまじうことのない雑業だった。

要約すると『異世界に重要参考物を落として来ちゃったから拾ってきてー』である。

たぶん、智蔵局の奴らから押し付けられたのだろうなと想像してみる。

「つーか、こんな純度の高いミスリルなんて落とすなよ……」

俺は指令書に付属された資料を見ながら愚痴をこぼす。

ミスリル

銀色に輝き、鋼よりも硬く、アルミ並に軽い希少物質。

異世界によっては存在しない世界もあり、非常に有能な物質。

純度の高いものは多量のエネルギーを蓄えられ、
再利用可の万能エネルギー媒体として使える。

まあ、異世界によってミスリルの性能は変わる。

これはその世界のミスリルに含まれる不純物の影響で公社でも日夜
研究が続けられている。

今回、落とされたミスリルの性能は”魔”を溜めこむことができる
シロモノらしい。

なんでも近くににいる動物を魔物に近づけたり、逆に魔物を普通の動
物に近づけたりするらしい。うん、よくわからん。

こんな仕事はちゃっちゃと終わらせるに限る。

が、
付属された資料には落とされたとされる異世界の地図があるのだ

「邪王の森”ってなんぞや？」

資料には”邪王の森”についての情報も載っていた。

なんでも、この異世界には邪王と呼ばれる魔物がいて、そいつは
何百年も前から近くの人間の町へ魔物をけしかけ、自分の領地”邪
王の森”を広げていつているらしい。

人間側も黙ってはおらず、幾度も邪王を討伐すべく、複数の国の軍

隊を送り、それなりの戦果をあげているようだ。

今現在は邪王側と人間側の勢力は拮抗し、”邪王の森”のまわりには人間により結界が造られたが、それ以上は進行できない状況とのこと。

ちなみに、この世界はよくある文化は中世レベルの剣と魔法の世界らしい。うん、よくわかりやすい。

「にしても邪王側にあんのかよ。めんどくせー」

そう、俺の探し物はまさにその”邪王の森”にあるのだ。正確には森の湖に沈んでいるとのこと。

ちよいと拾って帰ってくるだけでは済まなそうだ。ぐへえ。

「長期任務なんて冗談じゃねーぜ」

ちなみに冒頭の時点で俺はすでに異世界についている。

俺達、公社の規則として異世界への干渉はできる限り控えなければならぬ。

の、割には仕事に必要なものは職員の共通の支給品（制服など）以外は現地調達だ。無論それらを手に入れるには多少の干渉をしなければならぬ。

なんでも、公社から多くのオーパーツを持ち込むより影響が少ないからそうだ。

「服はつと、こんなもんでいいか」

異世界任務が主な職員の制服には異世界任務に支障をきたさないために工夫が施されている。

- ? 絶対に破れたり、消耗したりしない。
- ? 外部からの衝撃や熱などを無効化する防具として機能する。
- ? 防寒性、通気性、防水性などが気温や湿度に自動的に適応する。
- ? 4次元ポケットがついている。
- ? 形状が自由に変えられる。
- などなど、ものすごく多機能で万能なのだ。

特に?が本当に便利だ。

オシャレを気にする奴は「毛皮の質感を再現しきれない」などで普通に服を買ったりしているが

俺のような服を気にしない奴らなんかは休暇や自宅でも制服を着ている。汚れたりもしないから洗濯いらずだし、形状を変えてジャージや寝間着、普段着などと着替えもいらぬ。

今の俺はフード付きのマントを羽織った旅人だ。こんな格好でも

この世界のどんな甲冑よりも防御力が高いだろう。

「一番近い町は南に10キロ弱か」

俺は地図を見ながら草原の中の道を歩いていく。

短期的な異世界任務……例えば、被召喚者の即時返還（第一話のあれ）など以外の

今回のような異世界任務では、ある程度その世界についての情報をくれるが、せいぜい任務活動範囲の地図や世界情勢程度だ。

総務局が押し付けてくる仕事なんかには資料も自分で探せて奴もいる。このくらい統括局は下っ端扱いされるのだ。

あと、異世界に来るときは知的生命体がない場所に転送されるようになってる。理由は上記の干渉云々のとおりだ。

……ガヤガヤ

「なんだ？ こんな道で市場でもやってるのか？」

地図をみたところ町まではまだまだ先のはずだ。

なのに人の声。しかも大勢とすると普通ではない。

「まあ、いいか。人がいるってことはその分情報もあるってことだ」

人の声の方へ近づいてみると思ったより大きな集まりのようだ。

その中へ入り込む。異世界の中には黒髪が珍しい場合もあるが、どうやらこの世界は別にそうでもないらしい。黒髪がわんさかいる。

「いや、だからこのまま進むのはまずいんだよ」

「明日までに着かないと納品に間に合わないんだ！　なんとかしてくれ！」

「イカルゴの大軍らしいぜ。南の町は大丈夫なのか？」

「そりゃあ、仮にも帝国のお膝元だ。討伐軍がすぐに退治しちまうだろ」

「塩買わんか？塩。　どうせ当分ここで足止めなんだ。野営には必需品だろ？塩」

ふむふむ、聞き耳を立てたところ、どうやらイカルゴという魔物の群れが南の町への道を塞いでしまっているらしい。

それで南に向かっている旅人や商人たちやらがここで屯たむろっているようだ。

まあ、討伐軍とやらが数日中に何とかしてくれるようなので、ここで待っていれば自然に解決されるようなのだが。

「そんなに待っていていられるかっての」

俺はこのかつたるい任務を一刻も早く終わらせたいのだ。まだ森にも着いていないのにこんなところで油を売ってる暇はないのだ。

イカルゴという魔物がどんなものかは知らないが、まあ何とかなるだろ。

そう思い、俺は集まりを抜け、南に向かう。

「ん？ニイチャン行くのかい？ やめとけやめとけ。命あつてのモノダネだぞ」

と思つたら、どうやら先客がいたらしい。さっき納品がどつこのつて言っていた奴だ。

確かに若い。いや、俺も十分若いのだが、どう見てもあいつは15、6だぞ？

「思いつきり走つて突つ切ればイカルゴなんて撒けるさ」

「おい、本当に死んじまうぞ！ 戻つて来い！」

そういつて若い商人は制止も聞かず、馬に跨つて行つてしまった。

小説ではありきたりな死亡フラグだな。

さて、タイミングを一度逃してしまったが、俺も行くとするか。

「おいおい、お前さんも行くのか？ まだ若いんだからそんなに死に急ぐな」

「無理そうならすぐ引き返してくるよ」

さつき若い商人を止めようとしたオッサンの商人が俺のこともやめるように勧めが、俺はやりわりと断る。

オッサンはやれやれと首を振った。

「おう、ボーズ。骨と荷物くらいなら拾っておいてやるぜ」

「バーカ、イカルゴが骨なんか残すかよ」

さつきは突然で声をかける暇がなかった他の商人たちがにやにや笑いながら見送ってくれる。

まったくもってありがたいこつて。

俺は苦笑しながら手を振りながら、歩く。

あ、しまった。邪王の森について情報収集しとけばよかった。

第二話（後書き）

一つ気になるんですが、この改行の仕方ってどうでしょう？ネット小説って普通の文章と違って読みやすくするのが難しい。

第三話（前書き）

拙い戦闘シーンがあります。

戦闘シーン苦手なんです……

第三話

「うわー!! こっちくんないー!!!!」
「.....」

あの集まりを離れて数時間は経過したあたりか、相変わらず草しか見るものがない草原の中の道だが、かすかに遠くの方に南の町のものと思われる城壁が見える。

帝国のお膝元だけあって、規模はでかそうだな。

「ひいー!!」
「あーあ」

さて、町に着いたらまず、食料を買って、武器を買って、邪王の森についての情報入手しないと。

「ぎゃー!!」
「あーらら」

あとできれば宿にも泊まりたいなあ。まったく長期任務はいろいろとやることが多いから本当に面倒だなあ。

智蔵局の奴らも情報管理機関ならそれくらいの情報を用意してくれてもいいだろうに。はああ。

「た、助けてくれー!!」
「よっこらしょっと」

やれやれ、そろそろ助けてやるか。

結局のところ若い商人は生きてた。たぶん、途中で馬を歩かせてたから徒歩で間に合ったんだと思う。あの馬どう見ても速さよりも力重視だし。

ちなみにイカルゴというのは小さい象みたいなイカだった。脚と鼻がたくさんある象と言えばわかるだろう。

確かに動きはひどく鈍いがあの触手は危険とみた。きっと一度捕まったら逃げるのは困難だろう。

そんなのがざつと見、20頭くらいの数がある。よくみたら少し離れた所にも30頭くらいの群れがいる。どうやらこのイカルゴの群れは一つの大きな群れではなく、小さな群れの集合体らしい。

あの商人はイカルゴに囲まれ、混乱した馬に必死にしがみ付き、絶体絶命な状況だ。

「うをーい、その商人。助かりたいかー？」
「つたりめーだー！ー！！！」

「うむ、いい返事だ。」

「じゃあ、助けてやるからちゃんとして現金で報酬くれよなー」

「金でもなんでもやるから早く助けてくれー！！！」

「よし、言質はとったぞ。」

あいつを助けるのは善意でも何でもなし。これから必要になるであろう。路銀および軍資金の調達のためだ。

あいつら商人は何も言わずに助けるとやれ「助けてくれと言っていない」だの「お前が勝手に助けただけでお礼をやる義理はない」だの聞き直ってくるからな。まったく油断ならん。

「さーて、人助け、人助けっ」と

俺は心にもないこと呟きながらイカルゴの群れに向かって走る。

俺はまだイカルゴに触れられない位置にいるが、イカルゴはこちらに向けて象の鼻のような触手を伸ばしてくる。

どうやら奴らの触手は伸縮自在らしい。まだ本体とは7メートルほど離れているのに触手はこちらに触れそうだ。

俺は己の腕に金の属性の派生型、刃の属性を込める。

あんな気持ち悪いものに触れるのは決して心地いいものではないが、遠距離の攻撃だとあの商人に当ててしまふ可能性がある。それは避けたい。

俺は触手を撫でるように手刀で払う。

するとどうだろう。触手はバターののように綺麗に切れてしまった。切断面が綺麗すぎてちよっとグロいな。

「ギャオオオオ」

俺、イカの鳴き声なんて初めて聞いたぞ。どちらかという象の鳴き声に近いなこりゃ。

仲間の鳴き声によって商人を囲っていたイカルゴ達がこちらへの警戒心を強めたようだ。

なんか全員がこちらに向けて触手をゆらゆらと揺らしている。非常にキモい。

意思疎通でもしていたのか。イカルゴ達が一斉にこちらに向けて触手を伸ばしてきた。

むう、無脊椎動物のくせして中々知恵を使うようじゃないか。

俺は3、4本ほど触手を切ってから、前転し、残りの触手を潜り抜けて、そのまま商人の元へと走る。

あまり時間をかけるのは控えたい。面倒だし。あいつを回収して、とっとと逃げよう。

背後から迫ってくる触手をバツサバツサ切り落としながら、商人が乗ってる馬までたどり着いた。

「おら、ちよつと場所空ける」

俺は商人を押しやり無理やり馬に乗る。俺が引つかき回したおかげで包囲網は穴だらけ、あの長い触手もあらかた切り落としたし、十分逃げられるはずだ。

俺は手綱を掴み。馬を落ち着かせ、思いっきり走らせる。

しかし、馬が包囲網の穴を抜けた直後、

「ぎゃああああ!!!!」

「ぬ!?!」

商人が後ろへと引っ張られる。どうやら足が触手に捕まってしまったようだ。

俺はあわてて手を伸ばし、商人の腕を掴むが、

「ぐぬぬぬ……」

動きが鈍いかわりにパワーは強いようだ。チキシヨウ。

「いだだだだだ」

俺だって腕がいてーよ！

片手は腕を掴み。もう片方は手綱ごと馬の首にしがみ付いている。とつか馬ごと引っ張られているんですが。

「しかたねえ」

こいつを見捨てるか。

じゃなく、俺は遠距離攻撃を仕掛けることにする。

本当は手を銃の形に見立てて、照準を定め、安定させるのだが、今はそれどころじゃない。

目の前に鋼の弾丸を創造する。狙うは胴体。

あーあ、こいつ目を点にしてやがるぞ。やっぱりこの世界にはこの系

統の魔法はまだできていないか。

魔力を充填。充填完了。

ベクトル調整。方向よし、角度よし。

ファイア
発射!!!

俺が魔力に点火すると弾丸は音を超え、目標に着弾。

一瞬でその巨体がバラバラにバラけ、貫通した弾丸は後ろにいた他のイカルゴを5匹ほどを巻き込み、地面に窪みを作った。

まあ、1・6mmの弾丸をマツハ4で打ち出せば当然だけどな。

さあ、さっさと逃げよう。

俺は相変わらず目を点にしている商人を馬に引き上げ、町へと向かう。

さて、いくら巻き上げるとするか。

第三話（後書き）

別に主人公は悪人ではないんですが、なんとというか無情なんです。許してやってください。

第四話

「なあ、あんた。魔術師か？」

「ああ、まあな」

金づり……ゲフンゲフン、若い商人が俺に訪ねてくる。

魔術師、魔法使い、魔導師など世界によって呼び方はまちまちだが、比喩的な表現を除き、みな総じて魔力などの自然界中の余分なエネルギーを使い、意図的に現象を引き起こす者のことである。

この世界では魔術師という呼び方がポピュラーなようだ。

「どうも魔術師っぽく見えないが、どっかの国の宮廷魔術師か何か？」

俺の今の格好がどう見ても普通の旅人にしか見えない。しかも、あんなアクティブな動作をしたのだ。

基本的に後方から遠距離魔法をバシバシ浴びせるイメージのある魔術師と俺は多少かけ離れているように見えるのだろう。

「いや、見ての通りしがない旅人の魔術師さ」

「明らかにしがくねーだろ」

むう、やっぱり。最後のあれはまずかつたかなあ。

どの世界にも共通して、魔術というのは自然物に変化を与えるものが多い。

水や火を生み出すのはともかく、人工物である鋼を生み出すのは前者と比べて非常に高等なテクニックが必要だ。

世界によっては、そんなことできるものなどいないというレベルである。

俺がそんなことができるのは別に才能でも何でもない。

会社には異世界で活動する職員用の訓練施設があり、そこで習っただけの話である。

この世界では困難でも、そこで訓練すればこの程度の魔術などたいていの人取得可能だ。

会社の知識量、技術力、叡智は世界1つ程度とでは比べ物にもならないのだ。

「そんなことより町まで面倒みてやるが、ちゃんと財布の準備をしておけよ」

「うう、嫌な奴に助けられちゃったもんだぜ」

チツ、どうやら髪の毛数本を散髪しただけで済んだようだ。

まあ、ブラインドだったし、本気で当てるつもりもなかったからな。本当に当たっていたらこっちが困る。

会社の規則により、異世界の知的生命体の殺生は基本のご法度だ。あのイカルゴ程度の知性しかもたない動物なら別だが、人間はまずい。

「奴隷なら身分証明書も通行料もなくとも門を通れるんだ。奴隷は物だからな」

商人という人種は本当に金がからむと知恵を巡らすものだな。

「しかたねえか。まあ、フードを被って裸足になりゃあ奴隷くらいには見えるだろな」

「ああ、それとこれもつけてくれ」

そういつて渡してきたのは鉄製の首輪。．．．．．なんとというか仕方ないとはいえ酷く屈辱感を覚えるぞ。

まあ、フリだしな。フリ。俺はおとなしく首輪をつけた。

．．．．．なんだろう。首輪をつけた瞬間、あいつが笑ったように

見えたのだが。

「さあ、もう町に着くぞ」

門の脇に槍をもった警備兵の姿が見える。

はあ、今回の任務はまだまだ始まったばかり、先はまだまだ長そう
だ。

「おい、止まれ」

警備兵がこちらに制止を呼びかける。

「おい、その道の先にはイカルゴの大軍がいたはずだぞ。どうやって抜けてきた」

「あんなノロマな連中なんかほいつほいつと抜けてきてやったぜ」

今の俺はこいつの奴隷ということになっている。

「こいつに助けられました」なんて言えるはずがないとはいえ、随分とお調子者だな。こいつ。

「そうか、運が良かったな。普通なら死んでいてもおかしくないぞ」
「へへへ、そこは神のご加護があったんだろうよ。商いの神様万歳
つてな」

「そっちのやつは奴隷か？」

「ああ、そうだ。ちゃんと首輪もついてるぜ。ほい、身分証明書。
早く通してほしんだがね」

「ん、確かに確認した。よし、通っていいぞ」

「はいよ。ごくろうさまで」

兵が門の内側に合図を送り、門が開かれる。

門の中は近くに魔物の群れがいるというのに賑わいを見せていた。

それはこの町が魔物程度でビクともしないという民の間で認識されている証拠だ。

うむ、これほどの規模ならば、きっと邪王の森についても多くの情報を手に入れられるだろう。

俺達は門から離れ、人通りがある程度落ち着いたところで俺はブーツを履き、商人に話しかける。

「おい、もう町の中に入ったんだから奴隷のフリはもういいだろ」
「ふふふふ」

なんだこいつ、いきなり笑い出しゃがって、気色の悪い。

「あーはっはっは。お前はもうずっとオレの奴隷だよ」

「ほう、それはそれは。ぜひともご説明願おうかな」

「お前のつけた首輪は特殊な魔術がかかっている奴隷専用の首輪でな所持者であるオレの命令は強制的に効くようになってるんだ。しかも、それはオレが外さない限り外れないし、壊れたりもしないん」
「d」

バキッ

「アッー！ 500ギルもしたのにー！ー！ー！」

壊れないはずの首輪が壊れたことより首輪の値段のことを気にするところが商人らしいな。

首輪にかかっていた魔術は5秒で解術した。

この程度の魔術式なんて公社の実技試験に比べれば子供騙しのよう

なものだ。

「さ・て・と、じゃあとりあえず慰謝料として金目のものは1つ残らず置いて行ってもらうか」

「お、鬼ーーーーー!!」

うっせー。命の恩人を奴隷にしようとした悪魔に言われたくないな。

つて、おおっと!?

俺がバックステップした直後

ブンッ

42

「その人、早く逃げなさい!」

「へ?」

いきなり俺と商人の間に割り込み、剣を振ってきた影に俺はいち早く反応した。これは訓練では得られない経験による反応だ。

割り込んできた影はどうも女性のようなうだ。しかし、立派な甲冑を身に着け、典型的な西洋剣を俺に向けている。

憲兵というより騎士のような出立ちだ。

「????。……ありがとよ！ 騎士様」

一度、女性と俺を見比べた後、あいつはニヤツつと笑みを浮かべ、一目散に逃げていきやがった。あの悪魔め。

野郎、本当に商いの神さんの加護でもついてるんじゃないか？
いくらなんでも運が良すぎだろ。

それとも俺の運が悪いだけか？

「あなたのような、ならず者を放置することはできません。一緒に来てもらいます」

「やなこと」

俺はこれ以上、道草を食うのはごめんなんだ。
誤解を解くことすら面倒だ。

あの野郎にはきっちりお仕置きをしておきたいところだが、今はとにかく逃げよう。

俺は身を翻し、逃亡にはかる。

「待ちなさい!」

おいおい、あのねーちゃん甲冑着けてるくせにはえーぞ。おそら

く、風の魔術か何かをかけてるんだな。

うーん、しかたない。あれを使うか。

俺は路地に入り、物陰に隠れる。

ほい、発動っと。

「くっ、どこへいった!？」

ここですよ、ここ。

騎士のねーちゃんは俺の目の前で俺の姿を探している。

俺が今使っているのは魔術ではない。

これは公社職員に与えられる管理者権限の1つ。認識操作だ。

これを使うと使用者に対する認識を阻害することができ、目の前にいても例え触れたとしても気づかれない。

究極の隠密術なのだ。

ただし、その場から動くを解けてしまうことがあるのが欠点だ。

それに同じく認識操作ができる公社職員には効かない。

「風よ。我にその目を貸し給え」

無理無理。調査や探知でもこの認識阻害は破れない。

「おかしい、周囲にも反応がない。こちらの阻害をしているのか。あとは考えづらいが転移ができるほどの魔術師なのか？
どちらにしても危険人物には違いない。即刻、指名手配しなければ」

えー！？ ちょっと、ただかチンピラ（第三者視点）にそれはやりすぎだろ！

この町で動きにくくなっちまうじゃねーか。

「最近、カリドナ教国の間者が首都に潜んでいる噂があるし、警戒するのには越したことはないでしょう」

説明ありがとよ、ねーちゃん。

でも俺全然関係ねーんだけどな。

まったく、今回の任務は本当についてないぜ。やっぱり、あのおっさんが寄こす仕事は面倒事ばかりだぜ。

あーあ、この仕事が終わったら絶対休暇を取ろう。そうしよう。

第四話（後書き）

ユッキーじゃなく主人公の方がトラブルメーカーですよ、この展開。

そこは主人公なんだから仕方ないということで（ある意味、主人公補正）。

第五話

「そののにーちゃん。これ買っていかないか？」

「いや、遠慮しておくよ」

ていうか金ないしな。

あの女騎士をまんまと撒き、俺は町の市場を歩いている。

ここなら人が多く、あのねーちゃんがいたとしても見つけられることはないだろう。

木を隠すなら森の中だ。

それとここにきたのはもう一つ目的がある。貨幣についてだ。

俺は当り前なことだが、この世界の貨幣のことなんて知らない。

そこで市場で金のやり取りをじっと観察することにした。

観察してわかったことはいくつかある。

この世界の貨幣で一番小さい単位はレルというらしい。

そして1000レルは1ギルという単位になる。

貨幣の種類は今のところ銅貨5種類と銀貨3種類づつ確認してい

る。

銅貨の場合、1レル銅貨、10レル銅貨、50レル銅貨、100レル銅貨、500レル銅貨があり、
銀貨は、1ギル銀貨、10ギル銀貨、50ギル銀貨があるようだ。

さらに大きな単位の貨幣がありそうだが、この市場ではお目にかかることはなさそうだ。

それと物価から換算して10レル＝1円くらいの価値のようだ。

つまり

10レル ＝ 1円

1ギル ＝ 100円

10ギル ＝ 千円

ということだろう。

日常生活ではこのくらいの知識があれば十分だ。

さて、今の俺には金が1レルすらないわけで、だからこそあの野郎から金を強奪……および寄付してもらおうを思ったのだが、失敗に終わった。

しかし、俺はたいていの異世界で簡単に、それも暴力沙汰無しで金を稼ぐ術を持っている。

俺は一旦、市場から離れ路地に入り、その辺に転がっている材木を拝借する。

「チチンパイパイ」

別に詠唱なんぞいらないが、気分だ気分。

すると持っていた材木が姿を変え……

テツテレーン

大見 は ダイヤモンド を てにいった。

……お遊びはこのくらいにして（飽きた）、
今俺がやったのはいわゆる錬金術ってやつだ。
まあ、これも魔術の一種なんだがね。

木片の主成分である炭素はダイヤモンドの構成物質だ。

木片中の炭素原子を一か所に集め、立方晶に再配置し、それ以外の物質を除外すれば、ダイヤモンドの完成だ。

俺の腕ならその辺の石ころを金銀に練成することもできるが、それは「法度」なのだ。

原子そのものの改変はその異世界中の自然に影響を与えることにな

るからだそうだ。

俺はちょっとくらいならいいと思うんだがね。

俺は出来たてホヤホヤのダイヤモンドを持ち、さっきの市場で見かけた宝石商のところへ持っていく。

さてさて、いくらになるのやらね。

結果として、俺が作ったダイヤモンドはまあまあ高く売れた。

俺の練成したダイヤモンドは量自体は少量だったが、この世界の研磨技術では表現できぬであろうカット面のうえ、不純物のない純潔といってもいい出来がいくつもあったからな。

今の俺の手持ちは200ヨルドだ。

ああ、ヨルドっていうは新しく分かった貨幣の単位だ。

100ギル＝1ヨルドになる。

つまり1ヨルドは壹万円である。

この単位は金貨で表せるのだが、金貨には1ヨルド金貨しかなく、10ヨルド金貨や50ヨルド金貨はないそうだ。

おかげで俺は大量の貨幣を持つことになってしまったが、この制服の4次元ポケットに入れておけば、重さも量も関係ない。

ついでに金貨数枚を1ギル銀貨と10ギル銀貨に換金させてもらった。

これだけの量の貨幣をポケットに仕舞いきる俺に宝石商は驚きを隠せなかったようだ。

「あなたは何処かの賢者様で在らせられるので？」

「ただの旅人さ」

ついでに邪王の森について聞いてみた。

「俺は邪王の森を目指しているのだが、何か情報はないか？」

「じゃ、邪王の森ですか……」

「どうした？」

「い、いえ……。ここではなんですから、奥の方へどうぞ」

「どうやら邪王の森の話題というのは人前でするものではないらしい。」

ずいぶんと恐れられているものだな。邪王というのは。

「して、どんな情報をお求めで？」

「正直、俺は邪王の森について何も知らん。出来た経緯などを省いた、常識を含めた情報を教えてくれ」

店の奥の商談室のような場所に案内した宝石商は俺を不思議そうな顔で見ながら、説明をしてくれた。

宝石商の話で邪王の森についてわかったことは

- ? 邪王の森はこの世界の3大強国であるアラガ帝国、カリドナ教国、ミウリア皇国と接しており、各国共有の結界で囲まれていること
- ? 結界にはいくつか入口があり、それ以外の場所から入ることはできないこと
- ? 結界の入口、関所を通るには許可証が必要だということ
- ? 許可証を得るにはギルドに登録するのが手っ取り早いこと
- ? 時折、結界を越えてくる魔物で各国とも災害を被っていること
- ? 邪王の森では珍しい鉱物や宝石が取れ、それが高く売れること

「もし、森に入り、珍しいものが取れましたら、どうぞこのアルテイリア商会の看板をお探しください。お高く買い取らせていただきます」

商売の上手なこって。

俺は情報料として宝石商に10ギル銀貨を数枚渡し、店をあとにする。

さて、この町に長居は無用だ。ここから一番近い結界の関所があるという帝国領スルブラという町へ行くとしよう。

といきたいところだが、

「まずは食糧と武器を買って、それから宿だな」

さすがに今日はもう歩くのはごめんだ。日もだいぶ傾いて、あと数時間もしない内に空が赤く染まることだろう。

市場で林檎っぽい果物と干し肉や飲み物、毛布や食器類など野宿の必需品を購入し、市場を出る。

俺は公社からの支給品である地図を開く。

この地図は見た目こそただの紙の地図に見えるが、これは異世界中の叡智が収集された公社製の地図だ。普通の地図とは一味違う。

この世界に来た頃はこの町（ちなみに帝国領第4都市キリスというらしい）へ道のりが載っていたが、今はこの町の全体図が載っている。

この地図は現在地を中心として縮尺、拡大ができる便利な地図だ。異世界地図から小部屋の間取りまで自由自在。

さらに敵の配置まで写すことができる。会社さまさまだ。

そうして地図を確認しながらついたのは鍛冶屋だ。さらに言えば武器屋だ。

しかし、置いてあるのはハサミや鎌、包丁のような生活用品ばかりで剣や槍は申し訳ない程度に店の隅においてある。

近くに戦場があるわけでもなく、邪王の森ともそれなりの距離があるこの町では武器の需要は皆無であろう。

せいぜい、警備兵の武器の整備がある程度だ。

「何かお求めで？」

いかにも鍛冶屋の堅物といった風のオヤジが片目でこちらをチラ見し、言葉だけの接客をする。

「ああ、これをもらおうか」

俺はちんまりとした武器コーナーにあった全長30cm程度のダガーを選ぶ。

主力の武器としては少しリーチが足りないぐらいだが、これくらいのサイズが俺的には一番凡庸性に優れた形状なのだ。

「あいよ。80ギルだ。鞘はいるかい？」

「ああ、頼む」

装飾の類は一切ないが、刀身は頑丈そうだし、柄とのズレもなく、刃もキツチリ整っている。重さも適度で丁寧な品だ。作者の密かな武器への情熱が窺^{うかが}える。

「素直な刃だ。大切にに使わせてもらおうとするよ」

「……おお、そうかい。ありがとうよ」

無愛想なオヤジでも丹精込めた作品を褒められるというのはくるものがあるらしい。こんな平和な町では武器を褒められることはないだろうからなおさらだ。

オヤジの好感度を無駄に上げつつ、今度は宿を探すことにする。

予定だったのだが……。

「見つけたぞ！ ならず者めっ！」

「ぐへえ」

地図で確認済みの宿へ向かう途中で望まぬ再開を果たす。

マジでうれしくねー。

しかも今度はあのねーちゃん以外にも仲間がいた。

ねーちゃんと同じ甲冑で短槍を持った不精髭の男とレイピアを腰から下げている好青年だ。

「おいおい、どうみても普通の旅人じゃねーか。こいつが教国のスパイだなんて本当なのか？メリア」

「見た目に騙されてはいけません、ジャドー。こいつは少なくとも私以上の風魔術の使い手です」

「だがなあ」

「まあいいじゃないですか、ジャドーさん。お話を聞けばわかることですよ」

「カインもメリアも猪突猛進なんだからなあ。まったく」

なんか明らかに「今後とも登場する主要キャラ」な感じがビシビシきてるんですけど……。

「わりーな。ちっとこいつらの気が済むまで付き合ってくれや、にーちゃん」

あんたももうちょっと頑張って止めてくれよ。

「では、覚悟！」

「殺す気かよっ！」

メリアがこっちへ切り込む姿勢になり、俺はさっき買ったばかりのダガーを抜く。

と同時にダガーに金の属性で強化し、硬度を高め、刃の属性を込め、切れ味を強化する。

刃の属性は刃物を媒体にした方が効果は何倍にも増加するし、効率が良い。

それにこんなこともできる。

ザンッ

「！？ 風の刃かつ！」

俺が放った斬撃をメリアが伏せて避けつつ、その正体を考察する。

確かに風の刃に似てはいるが、別物だ。

今のは俺が振るったダガーの斬撃を飛ばしたのだ。

刃の属性は媒体とした刃物の強化だけではなく、斬撃を飛ばしたり、伸ばしたりできるのだ。

風の刃とどう違うのかというと

風の刃は肉程度なら切れるが、骨や鎧は断てない。

それに対魔術用の防御や阻害によってすぐに霧散してしまう。そうでなくても風の刃は空気中でも周囲の干渉を受けやすく、狙いがズレたり、減衰しやすいのだ。

しかし、刃の属性によって放たれた斬撃は正真正銘の物理攻撃だ。

よってアンチマジックの類は効かないし、振るった時の速さによっては鋼であろうと切ることができる。

その上、水中だろうが、最初に設定した地点まで威力が弱まることはない。

やろうと思えば、次元の壁すら切り、斬撃を瞬間移動ジャンプさせることができる。

「あれほどの高密度な風の刃を放てるとなると、確かにたいした腕のようだ」

だから風の刃ではないと……まあ、刃の属性はそんなのよりも高度な術だけどさ。

「散開しろ！ 困い込むんだ！」

カインという青年が俺の背後に回りつつ、指示を出す。

たぶん、あいつがこの中で一番弱いな、力ではなく、スピードで翻弄し、隙について急所をグサツという戦法だろう。

対して申し訳なさそうな顔をしながら、俺の左側へ移動したジャドーというおっさんはファイタータイプだろう。

あの短槍は見るからに重そうだし、柄の先には球型になっている。刃の方で切り払ったり、刺突したりできると同時に柄の方は打撃攻撃に使えるいい武器だ。

そして、俺の前方で剣を構えるメリアは武器から構えから本当に王道だ。

攻守ともに優れたバランスタイプ。ああいうタイプが一番戦いやすいかわりに崩しにくいんだよなあ。

一番最初に動いたのは案の定、メリアだった。

おお、結構速いじゃないか。

ガキッ

俺は強化したダガーでなんなく受け止め、周囲を一瞬警戒する。

騎士の礼に則って、1人に対し、一度に複数人での攻撃をしないつもりか。

なめられたもの……いや、好都合と思うことにしよう。

俺はそんな好戦的な人間ではない、はず。

メリアは一度、剣を引いてから再度先ほどの攻撃を超える速度で振ってきた。

「ていやあああああ！」

「よっ」と

俺もさっきと同じように剣を受け止める。

メリアが攻撃し、俺が防御する。この応酬が数回交わされる。

そろそろ、勝負を決めるか。

俺はメリアの剣を受け、そして力いっぱいその剣を押し返す。

「くっ」

メリアは女性だ。生物学上、男である俺と力勝負は分が悪い。掴み合いはごめんだらう。

メリアは剣を引き、一度距離をとる。そうそれでいい。

今、メリアの剣は俺をその間合いに留めていない。

無論の、俺のダガーも届かない。

しかし、風の刃を放つ前に切り伏せられるそんな距離。

風の刃は周囲の風を圧縮して放つものだから多少時間がかかるのだ。

「なかなかやりますね」

「それほどでも、だがもう終わりだ」

傍から見れば、この状態はメリアが攻めきれず、俺は守るしかない状態だろう。

これはお互いの得物のリーチの問題であり、メリアも承知の事実だろう。

しかし、その認識が仇となる。

ブンッ

俺はダガーを振う、もちろんダガーの刃はメリアには届かない。メリアの剣でも届かない距離なのだ。届くとすれば風の刃ぐらいだろうが、風の刃独特の風が集まる現象も起こらない。

「？」

3人からすれば、俺がダガーの素振りをしているようにしか見えな
いだろう。

だが、

ガンッ

「ぐぐっ！」

メリアは胸を押さえ、倒れる。

カインとジャドーは目を見開き、メリアを見る。

メリアの甲冑は何か固いものでもぶつかったように凹んでしまっ
ている。

さっき言ったように俺は刃の属性によって斬撃を飛ばしている。

これは空気だとかそんなものではなく、刃物を振るったことで発生
する斬撃を飛ばしているのだから、発動条件は刃物を振うことだけ
で前兆のようなものは起こらないのだ。

だから、3人は俺の素振りを攻撃だと思わなかった。

やろうと思えば甲冑ごと切り裂くこともできるが、それでは死んで

しまつので手加減をした。

しかし、それでも甲冑を凹ませるほどの衝撃だ。女であるメリアには相当の衝撃だっただろう。

カインとジャドーはメリアの傍に駆け寄り、メリアを守る態勢を作った。

ジャドーも不可解な攻撃と仲間を傷つけられたことにより、こちらに明確な敵意を放っている。

まあ、確かに俺とメリアは殺気を放ってなかったから、そんな危険はなかっただろうけどさ。

先に仕掛けてきたのはそっちなんだぞ？ このくらい正当な防衛だ。

「なあ、力の差は見ての通りなんだから見逃してくんない？」

「メリアを傷物にされて黙ってられるか！」

「誤解を招く言い方はよせ、カイン。だが、確かに黙ってはいられないな」

「もともと、あんたらが俺を捕まえようとする理由は誤解なんだ。

それなのにいきなり襲いかかられたんだ。これくらい許せよ」

「メリアはお前が善良な市民に暴行を働く、ならず者って言うってい
たぞ！」

「それはだな……」

俺はあの商人に助けたのに騙されたことなどを話し、なんとか誤

解を解いてもらった。

「確かにその話が本当だとするとお前にはずいぶんな迷惑をかけたことになるな」

「ああ、だからさ。見逃してくんない？ 俺急いでるんだ」

「だが、自称ただの旅人に帝国騎士団がやられたとあってはちと外聞が悪いな」

え？ こいつらってそんな立場の奴らなの？

なんでそんな奴らが町中にいるんだよ。城の中にいるよ。

「悪いが、やつぱり署に来てくれんか？ すぐ釈放するからさ」

「お前らの評判なんてどうでもいいんだが……」

「可憐な少女を傷物にしておいてそれはないだろうよ」

「どこが可憐だ！どこが！」

「普段のメリアはかわいいよ！」

ジャドーはある程度、誤解はとれたが、カインの方はいまだに俺を睨んでいる。

ていうか、なんだこいつメリアに恋慕でもしているのか？

「いや、まだ宿が決まっていなくてな。早く見つけておきたいんだ」

「なら城の兵舎を使えばいい」

「は？ 何考えてんですか、ジャドーさん！」

「いや、城の兵舎ならガラ空きだし、俺達の口添えがあれば入れて

もらえるぞ」

「そうじゃなくて、僕はこいつを城に入れるのに反対なんです！」

「別にいいだろ。今は領主も帝都にいつていていないし、あそこにいるのは使用人と数十人の兵だけだ」

「兵舎？ 牢屋じゃなくてか？」

ジャドーという男が言っていることがいまいち理解できない。

「いいんだよ。見たところ、こいつは俺らだけじゃ敵わない。だが、城の中に閉じ込めておけばそうそう逃げられるものじゃない。あの中じゃ魔術は使えないしな」

「ようは城の中なら牢屋とさほど変わらないと？」

「俺らが落ち着いて話し合つには絶好の場所だろ？ 今ここでお前が暴れても国中に指名手配されるぞ。ま、お前はそんな争い事が好きな性格ではないと俺は読んでいるんだが」

はあ、まったくこんなことならメリアと初めて対峙したときに誤解を解いておけばよかったぜ。

「ああ、もういいよ。急いでいる自分が馬鹿らしくなってきた」

「じゃあ、さっそく行くか。ほらメリア運ぶの手伝えよ。それくらいいいだろ」

「しかたねーか」

「こらっ！ メリアに触るんじゃない！」

気絶しているメリアを1人で担ごうとしているカインを見ながら、夕暮れの風を浴びながら俺はちと頭を冷やす。

どうせ、この任務は長期任務確定だ。いまさら油を売ろうが道草を食う羽目になるうが、たいしてかわらない。

この任務事態が面倒事なんだ、これ以上面倒事を負ったところでそれほど時間の短縮にはならない。

最近ばかりの短期の任務ばかりだったから、早く終わらせようと焦っていたが、長期任務はのんびりやるのが楽な方法だ。

俺は長期任務の心得を思い出しながら、柄にもなく黄昏てみた。

それにしてもカイン君よ。意地を張っていないで手伝ってもらえ、女性とは言え、甲冑を着た人間を運ぶのは君一人では力不足だ。

第五話（後書き）

最後の方はなんかグダグダになってしまいました。ごめんなさい。

これからは話のペースがゆっくりになる予定です。

第六話

「確かにこれは城というより要塞だな」

俺はジャドーたちの案内でキリス城に来ていた。

キリス城は普通の王様がいるような城とは違い、豪華な装飾等がなく、外壁には地上の敵を射るための小さな窓があるばかりでバルコニーのようなものもない。

こんなに飾りのない造りをしているのは梯子をかけられ、敵が侵入してくるのを防ぐためだ。

「あれはまだ城の城壁だよ」

「こんな大きな町の中にあんな巨大な城壁を作ったのか。町の城壁よりも高いのに大したものだな」

「違う違う。キリス城はこの町ができるうんと昔からある城なんだ」

ジャドーの話によるとキリス城は邪王の森が現れるさらに昔から帝国を敵国から守り続けた最南端の軍事拠点だったらしい。

それが邪王が現れたことにより、邪王の進軍を阻む最前線となり、結界ができてからは敵国や邪王から攻められることがなくなり、冒険者、商人が行きかう大きな都市が出来上がったらしい。

「なんで結界ができてからは敵国の侵攻がなくなったんだ？ でき

る前なら一時休戦していたのだらうからわかるが……」
「邪王の森が南方の諸国と帝国の間にはみ出てんだよ」

なるほど、そりゃあ攻めてこれねえはずだ。下手に攻めたら邪王の森と帝国の挟み撃ちだ。

「おーい！ 帝国騎士団のジャドーだ。開門してくれ〜！」

ジャドーが城壁に向かって叫ぶ。門はすぐに開いた。

「ジャドーか。もつと遅くなってきたぞ。嬢ちゃんがまた何か仕出かしたんだらう？」

中から出てきたのはこれまたゴツイ体をしたオツチャンだ。

酒でも飲んでいたのか、少し顔が赤い。

「おいおい、まだ夕暮れだぞ？ もう飲んでんのか」

「いいじゃねーか。しばらくあの鬼領主様はいないんだ。酒が飲めるのは今のうちだけだ」

「まったく、町の外には魔物の群れがいるっつーのにだらしねーぞ？」

「イカルゴじゃこの町の城壁は越えられんさ。俺たちは帝都からの討伐軍が奴らを片付けてくれるのを待つだけでいい」

確かにイカルゴは野外戦ではめんどくさい魔物だが、籠城戦では何の役にも立たないただの的だろうな。

「そんなことよりお前さんたちはどうしたんだ？ そっちのにーちやんは？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

今の俺達の状況を確かに想像しがたいものだろう。

ジャドーがメリアを、俺がカインを背負っている。

何故こんなことになっているのかというのだな、

カインがメリアを一人で途中まで運んだ 無理が祟り、カイン君すってんころりん カイン坊、頭部を打ち気絶 ジャドーと相談した結果、ジャドーがメリアを、俺がカイン（荷物）を運ぶことに

まったくもって、揃いも揃って世話をかける。

カインよ、君とメリアはお揃いだよ。迷惑な意味でな。

「この二人のことは気にしないでくれ、いつものことだ。こっちは・・・・・・・・まあ、いちおう被害者ってやつだ」

「いちおうとはなんだ、おもっきり被害を被ったぞ」

この口ぶりからするとジャドールは苦労人らしいな。まだ知り合つて間もないのに親近感を覚えちまう。

「大見という。見ての通り、普通の旅人だ。約一名のおかげで宿を取れなくなつちまったんで兵舎を貸してもらいたいのだが」

「オーミか。そりゃあ災難だったな。兵舎ならその建物だ。案内してやるが、城の方には近づくなよ。あぶないからな」

城壁の中には訓練場と思われし広場や馬小屋、兵舎などなど見れば見るほど城というより基地といった印象を抱く。

「この部屋を使ってくれ」

俺に宛がわれた部屋は二段ベットが2つあるだけの睡眠をとることだけを主眼に置いた部屋だった。

主に戦時中に使われた部屋なのか、埃が溜まっている。

「まあ、小汚い部屋だが、その分好きに使ってくれていいぞ。ただでベットが4つも独り占めできるんだ。お得だろ？」

「ああ、体が1つしかないのが悔やまれるな」

俺は冗談を冗談で返し、部屋の中へと入る。

「腹が空いたら下の食堂に来ればいい、俺達が酒盛りをしてるから遅くまで開いてるぞ」

俺を案内してくれたオツチャン、 balan はそう言い残し、扉を閉める。

俺は部屋に1つしかない窓を開け、永らく使われていなかった部屋の部屋の空気の入れ替えを図る。

「ゲホッゴホッ」

予想以上の埃だ。

会社の清潔なベットの慣れてしまった身には耐えられない。

「掃除でもすつか」

俺は掃除という行為は嫌いではない。むしろ好きな方だ。

「とりあえず埃だな」

俺は部屋に溜まった埃を一掃すべく、風の魔術を発動させるが

「あれ？ ああ、そういえば城の中では魔術は使えないって言うってたっけか」

では魔術を使えるようにその秘密を暴きに……行かず、地道に手作業で掃除するでしょう。

埃を何とかするだけでも随分と時間がかかってしまった。

とつくに日はその姿を隠し、辺りはすっかり暗い。

部屋の中を照らすのは備え付けられていたランプの弱々しい灯りだけだ。

「さすがに腹が減ったな。食堂に行くか」

俺は部屋を出て食堂へと向かう。

まだ酒盛りが続いているのか、人が騒いでいるのが聞こえる。

俺が食堂に入ると案の定、ムサイ男たちが酒を片手にドンチャン騒ぎをしていた。

ある者は酒を呷り、またある者は酒を離さないまま突っ伏していた。その中に覚えのある顔を見つけた。

「あ！ いたー！」

「・・・・・・・・」

向こうも俺を見つけたらしく、俺の方を指さす。

指さしているのは迷惑騎士、メリアだ。しかし昼間見た厳しい顔と打って変わって上機嫌そうな笑顔である。酒のせいだというのは想像に難くない。

彼女と同じテーブルに座っているのはジャドー。

彼はまだまだ余裕がありそうどこちらに諦めを勧める目を向けている。

メリア、ジャドーがいるということは彼らと同じテーブルに突っ伏している頭はカインか。

彼はあまり酒に強くないようだ。

さて、御指名（？）を受け、無視するわけにもいくまい、あとで後悔するだけだろうし、俺は彼らのテーブルへ向かう。

「悪いな、また迷惑をかける」

「いいさ、乗っちゃまった舟だ。泥船だろうが、付き合つた」

ジャドールの詫びに俺は気にするなと返す。

「おう、あんたがメリアを負かしたって言う旅人か？」

いつのまにか他の酔っぱらいが集まってきた。

「いや、てーしたもんだ。メリアは帝国騎士の中でも実力派のトップエリートなんだぜ？俺たちが束になっても敵わん」

「なんでも魔術師だつて言うじゃねーか。それで接近戦もできるなんて何もんだ？」

「メリアだつて魔術を使えるんだろ？別に剣を振るえる魔術師がいたつておかしくねえさ」

「いやいや、魔術に詳しいわけじゃねーが、魔術つてのは厳しい修行に耐えた末に収得できる神様のご褒美なんだろ？使えるつてだけでスゲーつて」

む、そうなのか。

どうやらこの世界では魔術師＝神官みたいな役回りにあるようだ。

ならこの世界の魔術レベルは高が知れるな。

魔術などの神秘を扱うものは淘汰されてこそ著しく発展する。

神聖視しているようでは発展のきっかけを失わせるだけだ。

「俺はそんな大層なもんじゃねえよ。ただの旅人さ」

「ただの旅人が魔術を使えるんだったら、世界は賢者だらけだな。
ガハハハハ」

少し話はずれるが、酒の力は偉大だと俺は思う。どんな話題でも最後には笑いで終わらせることができる。

無論、弊害もある。

「ならず者〜！」

「ぐえっ！」

メリアが俺の首に巻きついてきた。

抱きついてではない、巻きついてだ。

メリアの長めの金髪が俺の鼻孔をくすぐくすぐ擦る。

よくある小説ではシャンプーや石鹸の甘い香りがするらしいが、

生憎とこの世界にそんなものはない。
というか酒臭いだけだ。

「喰らえ！」

「痛い痛い痛い！」

メリアの頬と俺の頬が強い摩擦で熱を帯びる。

今俺はメリアに頬擦りをされている。

カインが起きていればものすごい勢いで睨まれ……いや、切りかかってくるかもしれないな。

一般的には羨ましい状況なのだろうが、これはそんないいものではない。マジで痛い。

「アーハッハッハ！ どうだ坊主。帝国騎士様の熱い頬擦りのお味は」

「血の味がする」

頬擦りが強すぎて口の中を切ってしまったようだ。

俺の返答に「そうかそうか」と周囲が笑う。

するとメリアがいきなり真剣な顔をした。

「私を負かしたのは貴様で3人目だ」

いや、そんな真剣な顔をして片頬が真っ赤になっているから笑いを誘うだけ……

俺の頬もあんな感じになっていると考えると思わず手で隠してしま
う。

「決めた！ お前、私たちと一緒に邪王の森に来い！」

「はあ？」

いや、邪王の森に行くのは俺も目的が同じだからいいとして、こ
んな奴らと行動するのはごめんこうむる。

「メリア、いくらなんでも一般人を邪王の森に連れて行くのはまず
い。任務は俺達だけで大丈夫さ」

「やだやだやだ〜！ こいつも一緒に行くのー！」

すっかり幼児と化したメリアがタダをこねる。

素面でも迷惑な奴だが酔っぱらうと更に拍車が掛かるらしい。

「邪王の森に行くの別にいいが、お前らと一緒にごめんだ」

「ぶー」

「ほらメリア、当人が嫌だっけって言うてるんだ。諦める」

ジャドーがメリアを宥めるが、

「ならこうしよう。お前……えっと」

「大見だ」

「オーミ！私と勝負しろ！ 私が勝ったら黙って私たちと来い！」

「今のお前と勝負だと？ お前酔拳でも使うのか」

「これで勝負だ！」

そう言ってメリアが取り出したのは1ギル銀貨だった。

「表が出るか裏が出るか、賭けで勝負だ！」

コインジャッジ

実にシンプルな二者択一方法。

「神がこれでお前の運命を決めてくださる」

「何大層なことを言っただやが」

「ちなみに私は表に賭ける」

「必然的に俺の賭け口を決めんじゃねえよ」

とは言つものの、俺が何を言おうがメリアは前言を撤回しないだろうし、下手に抵抗したところで無駄な足掻きなような気がする。

ここはおとなしく従った方が被害が少なそうだと俺は今日の経験で判断する。

「一応確認をしておく、どっちを表にする？」

「陛下のお姿が描かれている方に決まっておるだろうが！ 馬鹿にしているのか貴様！」

マジギレかつこわるい。

いつの間にか大人口調に戻っているメリアを差し置いて、俺は銀貨を分捕り指で弾く。

「あ！」

メリアは自分で弾きたかったのか、恨ましげに俺を睨む。

なんだかんだで正々堂々なメリアのことだからあまり心配をしていないが、いちおうイカサマ防止のためだ。

無論、弾いた俺もそんな小細工はしない。というかそんな技術はもっていない。

「俺が勝つたらここの飯奢れよ」

銀貨は加速を緩め、万有引力に抗うことなく落下する。

テーブルにたどり着いた銀貨がささやかな弾性により2、3度小さく跳ね、俺達にその面を向ける。

結果だけを言うならば、俺は金の心配をすることなく、飯にありついた。

「詐欺だ！ 魔術でイカサマしたんだ！」と騒いでいたが、魔術を使えないのは明白だ。

城の中では魔術は使えないからな。

ついでに昨夜のうちに再度己の無実を証明し、無事、解放された。

結局あの後、酒盛りに付き合わされた上、兵舎のベットは固く、まだ残っていた埃のせいで快眠とはいかなかったが、俺はそうそうに町を出ることにした。

食糧、武器、邪王の森の情報、もうこの町に滞在する理由はない。

もうあいつらとも会うことがないことを願いたい。

「主要キャラな気がしたが、そんなことはなかったんだぜ」という

ことになってほしいものだ。

翌日の早朝、こんな朝早くから門番を務めている兵士を労いつつ、町から1歩出て、止まる。

引き返そうとも思ったが、素直に諦めることにした。

俺を待っていたかのような……いや、待っていたのである
う馬車と人影に近づいて行く。

「やあ、おはよう、たびたび迷惑をかけるな」

「おはよう、そう思うならちゃんと止めてくれよ」

人影、ジャドーと俺は苦笑を交えながら朝の挨拶をする。

「他の2人はどうした？」

「2人とも馬車の中だ。カインはまだへばってる。メリアも俺に馬車を任せて寝ている」

とことん損な立ち回りだなジャドー……。

「あーわかったわかった。ついていきゃあいいんだろ。もう諦めた
な」

さて、不本意ながら仲間ができてしまいましたとき。

といつか2日目の朝からどっと疲れた。こんな調子で大丈夫なのか
俺。

第六話（後書き）

自分で書いててなんだけど、大見ってめっちゃ主人公に向かない性格なんですよね。

だからこっち（メリア）で無理やりそういう風（面倒事を巻き込ませる）にしないと話にならない。

具体的に言つと大見一人で異世界観光的な展開になつてしまふ。

「景色がきれいだな」とか「やっぱ異世界だな」とかこんな話題しかなくなる。正直これだつつまらない話になる。

ほのぼのの系は自分無理つすorz

第七話（前書き）

今回は短いです。すみません

第七話

「何故貴様がここにいる！」

俺たちは今帝国の最南端の地、結界関所のある町、ブリクトに向かっている。

キリスで別に望んでもいない”足”を得てしまった俺は慣れない馬車の揺れにに悩まされながらも、のんびり地平線まで続く青々とした草原を眺めていた。

会社の本部がある惑星は全部人工物で埋め尽くされているのでこういう風景はあまり見れないのだ。

だから異世界にいる間でも見ておこうと思ったのだが

「おい！聞いているのか！」

「……………ジャドー、これはいったいどういうことだ？」

メリアが目覚めたのだ。

いや、正確にはそれだけではなかった。

メリアは俺が自分たちの馬車に乗っている心当たりがないらしい。

寝ぼけているわけでもなさそうだ。

「あー、やっぱり記憶が飛んでるか」

「やっぱりって……おい、ジャドー」

「わかったわかったちゃんと説明してやる」

ジャドーによるとメリアは酔っ払っている間の記憶がなくなるらしい。

確かにアレ（幼児化）を覚えていれば、自殺を図ってもおかしくない。

メリアと知り合って間もない俺でもわかる。

ん？ということは

「別についてこなくてもよかったんじゃないか？」

「まあ、結果的にはな」

俺は早速、馬車から下りようとするが

「待て！」

「なんだよ、誤解を解いたことも忘れちゃったのか」

「いや、それはジャドーから聞いている。だがお前のような怪しい奴を見逃すわけにはいかない」

どのみちダメなのね……。

「姓は大見、名前は幸治。呼ぶときは大見と呼んでくれ。出身は日本、趣味は掃除、洗濯などの物を綺麗にすること。特技はサバイバル（本来の意味で）、嫌いなものは『面倒事』だ。なんら怪しいところはねえよ」

「怪しくないと自称する時点で怪しい。

私は帝国騎士団、風の騎士メリファーナ・シル・アンバツシュ、趣味は鍛練、特技は馬よりも速く走れることよ」

「オレはジャイード、家名はねえ。

見ての通り帝国騎士だ。メリアと違って下っ端だがな。

で、こっちで寝てんのがカインツウエル・・・なんだっけ？」

「カインツウエル・ラウ・ミカレード・パオキラ・ジエシヨット・ラバ・ギルベインよ」

「ああ、そうだった。こいつも帝国騎士だ。聞いての通り、ギルベイン公爵家のご子息だ」

いろいろとツツコミを入れたい自己紹介だが、置いてくとして。

「そんなお偉いさんとこの坊っちゃんを連れて行っているのか？」

「お前は知らないかもしれないが、帝国騎士に出生は関係ない。過去には王族や異国者になったこともあるのだ。

一人一人が帝国に仕える騎士として扱われる。これは誰であろうと帝国に貢献できる名誉を与えろという陛下の多大な御心で・・・

「ようするに？」

「お前がカインに無礼を働いたとしても問題ないってことだ」

それを聞いて安心した。

貴族様となんて関わり合いたくない。

「つまり陛下は慈悲深いだけでなく、聡明なお方でもあり……」

雑音機メシアを無視しつつ、俺はジャドーに質問をする。

「ところで帝国騎士が邪王の森に何の用があるんだ？ 結界のおかげで邪王の進軍の心配はもうないんだろ？」

「ああ、だが危機が去ったわけじゃねえ。現に稀に結界を越えた魔物による被害が絶えん」

「そういえば、キリスに着く途中にもイカルゴの群れがあったしな」
「……正直、イカルゴの群れを突破する時点でただの旅人じゃないんだがな」

今思えばもう少しおとなしく済ませておけばよかったな。

「オーミこそ邪王の森に何か用でもあるのか？ やっぱお宝目当てか？」

「ちよいと野暮用を押し付けられちまってな。落とし物を探しに行くんだ」

「邪王の森で落とし物つつうと……形見か何かか？」

「いんや、そんな大層なもんじゃねえさ」

俺は適当に誤魔化しておいた。

「にしても邪王の森ってのはつくづく金目のもんが落ちてるようだな。キリスでもお宝だの伝説の武器だのそんな話ばかり聞いたぞ」

宝石商にしろ、兵舎の兵たちは邪王の森っていつたらその話題ばかりだ。

ゲームのダンジョン何かでは普通に宝箱があるもんだが、普通に考えてそれはおかしいだろ。

「なんだ知らないのか？」

面倒見のいいジャドーによると邪王の森がある場所は元々、当時大陸を支配していた大国、カリドナ教国の総本山、聖地があったところらしい。

大陸の国々を傘下に治めていた教国は世界中の宝物、聖遺物、伝説の〜などなどをそこに集めていた。

「それが邪王が現れてからはお宝を運び出す暇もなく聖地ごと首都が吞まれ、教国の南の領地は邪王の森と化し、北方に追いやられた

教皇は泣く泣く他の国々に支援を頼み、各国と協力して結界を張った。

だが代償に北方以外の領地を邪王とミウリア皇国、そしてこの国、アラガ帝国に奪われた。今となつては過去の繁栄にしがみつくと亡者の国さ」

そんなわけで邪王の森の中、特に深部には世界中のお宝が放置されたままらしい。

「教国はその所有権を必死に主張し、元々所持していた国々は邪王の森に軍や冒険者を送り、着々と回収しているのが現状だな」

「なんとまあ、哀れなことだ」

「散々他の国を虐げてきた報いってやつだがな、だが最近の教国はどうもきなくせえ」

そういえばメリアが最初、俺のことを教国のスパイ云々って言うていたっけな。

ジャドール話を聞き終えた俺は改めて……そもそも一度もしていないわけだが、仲間としてあいさつする。

「何はともあれ、一緒に邪王の森まで頼むよ」

「ああ、こちらこそだ」

俺とジャドールはお互いを仲間と認め合う握手を交わす。

「陛下はその昔、邪王の森へと先陣を切った英雄でもあり……」
「ふああ、おはよう。メリア、ジャドー……ってなんでお前
がここにいる!?!」

とりあえず壊れたプレイヤー（メリア）とKYな寝ぼ助君はスル
ーすることにした。

異世界に来て二日目の朝は快晴であった。スガスガシイナ―

第七話（後書き）

1月中の更新はないかもしれません。

第八話（前書き）

体が二つ欲しい…。

でも樂でできる方を選ぶ度に喧嘩になりそうだ。

人間だもの…。

第八話

異世界と聞いて、普通の人にはどんな想像を巡らすだろう。

魔法や神秘が織り成すファンタジーか。

剣と剣が交える英雄譚か。

摩訶不思議な展開が次から次へと湧いて出てくる冒険譚か。

うむ、なんとも魅力的な響きだと思っよ。

少なくとも見聞きするだけならな。

「オーミ！ そっちに行った！」

「了解だ、くそつたれ！」

俺は、いや、俺達は今、帝国最南端の結界関所、ブリクトの町に向かっている。

当初は俺一人ぶらり旅とはいかないまでもゆっくり、そして厄介事にかかわらないように行く予定だった。

それも今となっては昔の話ぞ。

「カイン、もつと速く走れないか!？」

「もう限界だよ!！」

俺達が乗っている馬車は猛スピードで森の中を駆けている。

スピードを緩められない理由は俺達の周りにいる。

…狼である。それも30匹相当な数の。

「寝んねしてな」

ボンツ

「ギャインツ」

俺の放った火球が馬車に跳びつこうとした狼の腹を直撃した。

死ぬほどではないだろうが、もう追っては来ることはできないだろう。

俺の攻撃で警戒が強まったか他の狼が少し距離を取って走るようになった。脅威が少し減ったな。

「しかしすごいな、オーミは。複数の属性を扱える魔術師なんて王宮でもそうはいないぞ」

狼と距離が取れてからかジャドーが軽口をかけてくる。

ちなみに俺は基本属性である火、水、木、金、土、風等の属性魔術をある程度扱える。

これらの魔術理論は人によって違い、俺は東洋の五行思想と西洋の四元素説の両方を取り入れている。

節操がないといわれるかもしれないが、このどちらも利点があり、お互いの欠点を補うことができる。

基本的に戦闘時では五行思想を、解析や錬金には四元素説を使うことが多い。

まあ、詳しい話はあとにしよう。

「メリア、オーミ、魔術をもう一度かけ直してくれ」
「わかった」「あいよ」

俺は馬車自体に金属性の強化を施し、メリアは風属性で馬車にかかる風の抵抗を減らし、馬に回復魔術をかける。

これが必要ならば5人乗りの馬車などすぐに狼に追いつかれてしまっていたことだろう。

「もう少しで森を抜けるはずだ。狼も森の外までは追っては来ない。急ぐんだ！」

狼が獲物を逃がすまいと再び馬車に跳びかかろうとしてくる。

さっきと違うのは同時に5、6頭近付いてきたところだ。

「くそ、数が多すぎる」

「やつらの目を眩ませる。二度とお日様を拝めないようになりたくなかったら、絶対に後ろを見るなよ！」

俺は懐から小瓶を取り出す。

これはキリスにいたときに練成したマグネシウムを詰め込み、信管フラッシュバンを取り付けた簡易閃光手榴弾だ。

信管を引き抜き、急いで後ろに投げる。

これは光量や起爆時間などを細かく設定していないので網膜を焼くほどの光が出るし、すぐに起爆する。あとでしっかりとしたやつを作っておこう。

バンッ

「ギャウッ」

「ガウッ」

「キャインッ」

後ろで狼の鳴き声が聞こえる。うまくいったようだ。

前方に青い草原が見える。俺達が乗った馬車はそのまま森を抜けた。

「いやあ、オーミのおかげで助かったな」

「確かにオーミがいなかったら危なかったかもしれん」

前者がジャドー、後者がメリアだ。

キリスを出てからまだ3日と経っていないが、随分と信頼されてしまったものだ。

「あの魔道具はすごい威力だな。直接見ていないのにまだクラクラする。高価なものではなかったのか？」

「いや、あれは自作品なんだ。別に金がかかるようなもんでもないから気にすんな」

「魔道具まで作成できるなんて…さすがだな」

そうでもない。あんなの多少の知識と器用さがあれば誰でも作れる。

これくらいの工作なんてサバイバル技術の内に入らないさ。

「それよりそつちの子は大丈夫なのか？」

「ああ、気絶しているだけみたいだ」

さっきの森の中の描写に『5人乗り馬車』とあったが、これは別に誤字ではない。

俺とメリアとジャドー、カイン。そしてもう一人。

「しかし、危ないところだった」

「ああ、もう少し遅れていればこのガキは今頃狼の腹の中だったな」

この子供が狼の群れと追いかけてっこしていたのを見つけたのは森に入っすぐのことだった。

歳はまだ十を数えて間もないだろう。俺と似た旅人姿で低い身長がその姿を奇妙なものに見せていた。

まずメリアが助けに行き、見捨てるのも目覚めが悪いので俺も加勢することになった。

で、今無事に逃げ切れたところだ。

「こんなガキが森の中で何していたんだ？ 近くに村でもあんのか」

「いんや、この辺に村はないはずだ」

「じゃあ、キリスかブリクトからか？ 子供の旅にはちと背伸びし過ぎだろ」

「なんとも。この子が起きるまで待つしかないな」

カインが馬車を道脇に寄せ、停車する。

今日はここで野宿のようだ。森からもかなり離れているし、近くに肉食獣がいる気配もない。

なによりすでに日が暮れ始めている。

「火は俺が起こしておく、昨日と同じ感じでいいか？」

「ああ…優秀な魔術師一人いるとこないとじゃあ野宿も全然違うな。頼む」

俺は草の生えていない所に魔方陣を描いた。別になくても火は起こせるのだが、ないよりはあった方が安定するのだ。

燃焼時間は一晩分、火力は中火に設定。起動。

魔法陣が淡く光った後、炎が生まれた。

式に織り込んだ魔力を使い果すか、設定時間を過ぎるまで例え水をかけようが風に吹かれようが決して消えることのない焚き火の完成だ。

サバイバルには必須の技術である。

「いちいち森に行っては薪を集めたり、高い魔道具を買ったり、交替で火の番をしていたのが馬鹿馬鹿しく思えてきますね」

カインが愚痴をこぼす。

確かにこの世界の文明レベルでは火を起こす作業だけでも随分とてこずりそうだ。

火打石くらいならあるだろうが、夜遅くまで火を維持するのは苦痛を強いるに違いない。

俺への信頼は主にこれらの不便性を解消したところからきている。

いやはや、人って言うのは楽ができると知ると甘くなるものだ。

「ん、うん…」

「お、眼が覚めたか」

仔山羊ちゃん（狼に食べられそうになっていたから）は身を擦りながらゆっくりと身を起こした。

マントで隠れていたから気付かなかったが、中に来ている服はなかなか立派なものだった。

少なくとも基本的に金欠で喘ぐ旅人が手を出せるものではない。

印象としては貴族様が着る狩猟着だ。

どこかの貴族の子供が遠出で迷ってしまったのだろうか。

「失礼、大丈夫ですか？」

この中で最も貴族への対応に慣れていそうなカインが聞く。

「…あれ？ 僕は…」

「獣に襲われたのですよ。覚えていらっしやいますか？」

うむ、普段は口調が丁寧なだけの青年だが、こつという対応をしているところを見ると貴族つて感じがするな。

なんかこつ、片膝着いて手を取る仕草とか、相手の顔を上から見るようにしないところとか。

「…はい、覚えています」

「こつ無礼でしょうが、御名をお聞きしてもよろしいですか？」

「……」

尋問はカインに任せるとして俺は黙々と今夜の晩飯の支度をする。

といつても、それほど凝ったものは作れない。

まず焚き火のまわりに石を並べて台を作り、その上に水を入れた鍋を置く。ちなみに水は手持ちの飲み水に空気中の水蒸気を集めたものを加えているので大量にある。

次に香草を微塵切りにし、塩、干し肉、人参や大根、ゴボウに似た野菜をまとめて鍋に投入。少し煮ればスープの完成だ。

鍋は楽でたくさん作れるから多人数のサバイバルには持って来いである。

「もう少しでできるから皿用意して待ってるよ」

「えっ？ あ、ああ。わかった」

メリアに話しかけたが、ご当人は保護した子供の方が気になるようだ。

横目でカインの方を見してみる。仔山羊ちゃんは俯いていて、カインは一生懸命話しかけている。苦戦しているようだ。

「どうしたんだ？ あれ」

「あの子が名前をどうしても喋らないのよ」
「ふーん」

ま、別にあの子供が貴族だろうとなんだろうと興味はない。

俺は助けただけで満足なのだ。

「カイン、別に無理して聞き出さなくてもいいじゃないか。その子が何者であれ、町まで保護して行くのに変わりはないだろ」

「いや、でもですね…」

「オーミの言うとおりだ、カイン。どのみち明日中にはブリクトに着く。あとはそのギルドにでも任せよう」

俺の意見にジャドーが賛同してくれた。

こんな草原では例えその子供が貴族だろうとなんだろうとどうしようもない。

それよりも町で安全を確保してから専門家に任せの方がいい。主にこっちの労働的に。

「そんなわけだ、坊主。お前が何であろうと特別扱いなんかしねーぞ？　だが、ブリクトまでは確実に連れて行ってやる。それでいいか？」

「は、はいっ、よろしくお願いします」

仔山羊ちゃんがペコリと頭を下げる。うん、こういうところが教養のある真面目な子であることを示している。好感を持てる。

「そら、腹減ったろ？ 短い間だが、これからお前は俺達の旅仲間だ。遠慮なく食え」

「はい、ありがとうございます」

俺がスープの入った椀と木のスプーンを仔山羊ちゃんに差し出す。

仔山羊ちゃんは雑なスープや木の椀とスプーンを珍しそうに眺めていた。

「お、おいオーミ」

「ん？」

「もし身分高いお人だったりしたらどうするんだ！不敬罪だぞ！」

「カイン、俺はな。今までたくさん旅してきた。」

永遠と広がる広大な草原、神々しさすら感じる美しい山脈、生物を迷い込ませんとする不気味な森、見る者を圧倒するほどの青色を揺らす海原。

世界は広く、星の瞬きほど長く、人類の繁栄など小さく儂い」

異世界を巡り、そのたびに見たことのない世界の美しさを見るたびにしみじみとわかってものだ。

「俺は旅が好きだ。この美しさに溢れた世界を愛する。」

だから旅をしている間、俺はそういう人間の世俗を嫌う。

人間の世界は町の中だけだ。俺は町の中と世界を区別するぞ」

神と人類の技術に溢れた公社にいるときも俺はそれを意識する。
これはもはや崇拜に近く、変えようがない。

「……オーミは哲学的なことを言うんだな」

メリアが俺の言葉に感心したのやら呆れたのやら判断に困る反応をした。

「やっぱり本職の魔術師は言うことが違うな。それがオーミの魔術の秘訣なのか？」

「すまんオーミ、オレには半分以下しか理解できん」

「僕もなんとなくわかるような、わからないような……」

……正直、俺落ち込んでいます。

『何いってんの？こいつ』みたいな反応をされるとちょっと心に響く。

『何語ってんの？俺』的な気分になる。うがー…。

「とにかく！俺はいちいち貴族のご機嫌うかがいなんてしないんだ！以上！！」

俺はそうそうに話題を切り上げることにする。気恥ずかしいことこの上ない。

「おら、お前らも飯できたぞ！とつとと食べえ！」

俺は照れ隠しに3人に向かって喝を入れる。

今日はもう何も喋りたくない気分だ。チクシヨウ。

「あ、あの。お話素晴らしかったと思います！」
「……………」

うう、こんな子供にまで慰められるなんて…死にたいぜ。まった



第八話（後書き）

つつい語り始めてしまい、こっぱずかしい思いをしたことはい
いでしょうか。

自分がありますorz

第九話（前書き）

結局月を越えてしまった

第九話

「ようこそ、『冒険者達の町』ブリクトへ！」

途中でお荷物を抱えながらも俺達は無事ブリクトへと辿り着いた。

入門の手続きを終え、門番の激励を受けながら街に入る。

『冒険者達の町』とはよくいったもので、町の其処ら中に剣やら斧やら槍やら見たことのない武器やらを持った者達や怪しげな杖を抱えた黒いローブの群れがうろついている。

皆明らかに堅気ではない雰囲気を纏っており、肩でもぶつけようものなら腕の一本や二本を持って行かれそうである。もっとも俺の場合返り討ちにしてやるが。

「久しぶりに来たが、相変わらず門の外の方が安全そうな町だな」

「ん、ジャドーはこの町に来たことがあるのか？」

「騎士団に入る前だがな」

なんでもジャドーは各地の結界関所を廻りながら生計を建てていたらしく、この町にも訪れたことがあるらしい。

「なんでわざわざそんなことを？ 一ヶ所に拠点を作った方がメリツトがあるだろうに」

「そんなときの俺は相当荒れててな、問題を起こしては町を変えていたんだ」

「……あんまり人の過去には口を挟まない性質たちなんだが、よく騎士なんかになれたな」

「ガハハハツ、それはメリアのおかげだな」

「ジャドーを帝国騎士に引っ張り込んだのはメリアなんですよ」

まあ、普通ならここで過去バナが続くのだろうが俺は興味がないので聞かないことにする。

「それよりまずはどうする？ 宿でも捜すか？」

「それよりって……まあいいか、この子を安全な場所に預けるのが先だ」

おっと、そうだった。さっきからダンマリだから忘れてたぜ。

「あ、あの……」

「ん？」

「僕を冒険者ギルドまで連れて行ってください！」

邪王の森に侵入し、調査、魔物退治、発掘、採取等で生計を建てる者のことを基本的に冒険者と呼ぶ。

そして、その冒険者に依頼を斡旋したり、いろいろとサポートしてくれるのが冒険者ギルドである。

元々、ギルドと言うもの自体は存在しており、昔は無職者に仕事を与える何でも屋ギルドだったらしい。

また、これらのギルドは独自の組織を形成しており、国からの干渉を拒絶している。特に冒険者ギルド、傭兵ギルド、商業ギルドにその特色は強い。

と、公社からの資料には書いてあった。

国家間情勢や邪王の森の成り立ちは書いてないのに、こんなことは記載しているところが智蔵局のいい加減さが窺える。

帰ったら32枚目となる嘆願書を送っておくことにしよう。

「威勢はいいな、坊主。だが、冒険は絵本の中だけにしておくんだな」

「違いますっ、いいですから僕を冒険者ギルドまで連れて行ってください！知人がいるんです！」

俺達は顔を見合わせる。

「こいつはこう言っているが、どうする？連れて行くか？」

「ダメだ。冒険者ギルドなんて危険な場所に連れてはいけない。この町にも騎士団駐留所がある。そこに預けよう」

メリアが拒絶の色を見せる。まあ、それが妥当な判断だろう。

「お願いします、ギルドまで行かないといけません！」

「なんでだ？冒険者ギルドに何の用があるんだ？」

「そ、それは……」

またダンマリか。

「とにかく、僕は行かなくちゃいけないんです！」

「ああ、そう。でも俺はそんなの関係ないんだが……」

俺はメリア、ジャドー、カインを見る。

「私はやはり駐留所に預けた方がいいと思う」

「オレは別にいいけどな。オレ達なら子供一人連れていったって大丈夫だろ」

「僕はメリアと同じ意見だよ」

「俺は連れて行ってもいいと思う……見事に意見が分かれましたな、おい」

さてさて、どうしたもんかな。

と思っていたら仔山羊ちゃんが

「はい、僕はギルドに行った方がいいと思います！」

「…うむ、3対2か。多数決じゃ仕方がないな」

「な、ちよつと、オーミ…」

「そうか多数決なら仕方がないな」

「……ジャドーまで…」

仔山羊ちゃんの提案にまず俺が便乗し、ジャドーが更に乗ってくれた。

メリアは不服そうな目でこちらを見る。

「そう睨むなよ。ようは俺達が守ってやればいいんだ。帝国騎士様ならわけないだろう？」

「……ぐぬぬ…」

そんなこんなで冒険者ギルドまで連れていくことにした。お荷物は早めに片付けておいた方がいいからな。

だがなんだろう。俺の勘が『面倒事』に巻き込まれると呟いている。またメリア辺りがなんかするのかもしれない。

「ほう、さすがにデカイな」
「それはそうですね。ここは帝国南方領中の冒険者が集まるんですから」

一見、商館のようにも見えるこの建物が冒険者ギルドらしい。

入口の脇には屋根付きの大きな掲示板が立っており、何やら張り紙等がたくさん張ってある。

異世界なのだから当り前な話なのだが、見慣れない文字で書かれている。それでも俺はその文字の意味がわかる。

これも管理者権限の1つで意志伝達自動変換機能という、簡単にいえばテレパシーの改良版である。

言語や文字から『伝えたい情報』を読み取り、認識することができる。相手にはこちらの『伝えたい情報』を認識させることができる。

使いこなすと動物や植物、拳句の果ては鉱物とでも交信が可能である。俺はそこまでできないが。

これも異世界で作業するにはかなり便利な能力ではあるが、その世界の文字を書くことはできないのが玉に瑕きずである。

「討伐依頼が多い。魔物が増加傾向にあるという噂は本当だったのか…」

「こっちの掲示板にレイダー討伐の依頼があるなんて…明らかにDランク以上の依頼だろうに」

メリアとカインが掲示板を見ながら呟く。

冒険者ギルドの掲示板には2種類あり、表にある掲示板とギルドの中にある掲示板とがある。

表の掲示板はギルド登録をしていない一般人にも遂行資格がある依頼…たいていEランク以下の依頼が張り出されている。

ランクE以下の依頼というのは1人でも完遂可能であり、専門的な技術や知識がなくても大丈夫な難易度である。

ほとんどが町の中でのお手伝いか、せいぜい邪王の森の結界付近で薬草の採取くらいである。

いづなれば、小遣い稼ぎに受けられる依頼ということである。)
ジャドー談)

「こつちの掲示板にまで張り出されているということは…向こつちの掲示板はさぞ混沌としていそつだな」

ジャドーが溜息を吐きそつな顔で便乗する。

俺はというと魔物が増えよつが、減ろつが興味はないのでとつとギルドの中に入っていく。

すると厳つい顔のにーちゃん達が屯つて…いるわけでもなく、なんとよつか木造の銀行みたいな内装だつた。奥には受付カウンターが並んでおり、壁には張り紙がびつしり張り付いた掲示板が設置されてた。

「そら、坊主。お待ちかねの冒険者ギルドだぞ？」
「はい…」

皆より一足早くギルドに入った俺の背後にいたのは「ギルドに連れて行つてくれ」と頼んだ仔山羊ちゃんである。

「ほれ、ギルドに用があるんだろ？ 依頼でも受けるのか？」
「いえ、違います」

仔山羊ちゃんはそういうと受付へと向かっていった。

個人的にはここでリターンして宿探しに明け暮れてもよいのだが、さすがにそれでは後味が悪いので付いていくことにした。

仔山羊ちゃんは受付のねーちゃんに何やら尋ねているようだった。

「すみません、このギルド館長のレイン氏は居られますか？ 急いで伝えたいことがあるんです」

「アポイントメントはございますか？」

「ありません」

「何か御身分を証明できるものはありますか？」

「……これをレイン氏にみせてください。それでわかるはずですが、かしこまりました」

うむ、相手が子供でも丁寧な対応だ。

この世界のギルドはかなり組織化が進んでいるようだな。

「よう坊主、用事は済んだか？」

「もう少し待っていたいただけますか？ お礼は必ずしますので」

「それはそれは期待しないで待っているよ」

受付にペンダントのようなものを渡した仔山羊ちゃんと近くにあったベンチに座る。

俺は壁にある掲示板：正確には張り付けられている張り紙を見ている。

……ケルチの尾の上の黒い斑点の右の角の赤黒いところにくっついている虫の左前から4番目の足の爪を採取してくれという内容の依頼が目に入った。意味わからん。

「あ、あの、ありがとうございます」

「ん？」

「ギルドまで送ってくれて……」

「それなら俺だけじゃなく、メリア達全員に言うんだな」

「でもあなたは最初に賛成してくれました……」

「そんなのは関係なしにメリア達も協力してくれた以上、彼らにも礼を言うべきだ。礼をかかす奴は人から好かれにくいぞ？」

にしても人が少ないな。混むのは朝方なのだろう。

メリアがギルドは野蛮人が多いようなことを仄めかしていたが、あれはただの杞憂だったのかもな。俺もそう思っていたが。

「おい、オーミ、黙って先に行くな。気づいたらいなくなってるぞ」

ようやくメリアが俺の方を追ってギルドに入ってきた。

「ん？ メリア、ジャドーとカインはどうした？」
「駐留所へ到着の挨拶とお前の宿を探してくるそうさ。今日は人も少ないし、私とオーミで十分だろう」

合理的な判断だ。

「あ、あのっ」

「？」

「ギルドまで連れてきてくれて、ありがとうございます」

「あ、ああ。…騎士として民間人をほっておくのは心地いいものではないからな。当然のことをしたまでだ」

仔山羊ちゃんが早速、俺の注意を実行に移した。俺も公社に入社したての頃はよく注意を受けたものだったな。なつかしい。

「あの、お客様」

「ん？」

突然呼びかけられて振り向くとそこにはさっきの受付のねーちゃんかいた。

「館長が今すぐにお会いになられるそうです。こちらへ」

「そうか、ほら坊主。呼んでるってよ」

「いえ、お連れの方も来るように仰せつかっております」
「……ほら、メリア。お前も呼ばれてるってよ」
「あの……」

ああ、わかっているさ。俺も来いつてことなんだろう？

だが、俺はいかない。なぜかって？ 嫌な予感がするからだ。

「俺はここでジャドー達を待っているよ。行き違いになったりしたら面倒だしな」

「係の者を置いときますので大丈夫です」

「…俺はお偉いさん用の顔とか礼儀とか持ち合わせていなくてな」

「ここはギルドですので、そのようなものは不要ですよ。冒険者の人達はたいにい礼儀作法など知らない方が多いですから」

畜生、逃げ場がない。

「だが……」

「男がウジウジとみつともないぞ。お前は美人騎士指南の教えを受けてドギマギしている騎士見習いか」

なんだそれ。美人教師に手とり足とり勉強を教えられてモジモジしている思春期男子生徒みたいなもんか？

会社の訓練施設で指導を務めていたのはむさ苦しいオッサンばっか

だったから俺には経験のないケースだな。
憧れはあるが。

「あーはいはい。わかりましたよ。行けばいいんだろ」

そんなこんなで俺、メリア、仔山羊ちゃんはギルドの二階にある
一際豪華な部屋へと案内された。

中には甲冑を身に纏い如何にもツワモノですって感じのオッサンと
眼帯をつけた少し初老に入ったばかりであろう白髪のおバサンがい
た。

「やあ、よく来てくれました。私が当館の館長のイリンフィース・
ティン・ヤールラスです。
どうぞ、椅子のおかけください」

俺は言われたとおりに椅子に座りつつ、この2人の様子を窺う。

オッサンの方は身動き一つしない。まるで石像のようだ。

ただ石像と違うのは、死線を潜り抜けた者の独特の気配を纏ってい
るところであろう。しかし、炎のような荒々しいそれではなく、湖

の水面のような静けさを感じさせる。

『歴戦の戦士』、といった印象だ。

オバサンの方はというと、ニコニコを温かい笑みを浮かべているが、隣のオッサンと同様、もしくはそれ以上の修羅場を経験しているに違いない。

何故そう思った？ 公社の訓練所の監督官と同じような雰囲気
を纏っているからだ。あの公社中の荒くれ者のたまり場、武掃局の
局長と同じ…な。

ちなみに武掃局と言うのは公社の軍事機関を束ねている局だ。

あそこの局員はいろいろと問題有な奴ら『しか』いない。平穩に過
ごしたいなら絶対に関わりあいたくない連中である。

「さて、さっそくで悪いのですが、そちらの護衛さん」
「護衛ではありません。偶然、この子供を保護した騎士とその他で
す」

メリアが即座に訂正を入れる。マメな性格なことで。

もちろん、その他とは俺自身のことであろう。今更だがメリアは相
変わらず俺を乱暴者として見ている節がある。なぜだ。

「あら、そうだったの？ それじゃあ、その方が何者であるか、知っていらっしやって？」

うぬぬ…何やら重いプレッシャーを感じる。やはり俺の勘は正しかったようだ。これは大変なことになりそうな面倒事だなあ。

「い、いえ…」

「あ、あの、この人達は本当に僕のことを知りませんし、偶然助けくれたのは本当です」

「そう、ですが事が事ですので、念を入れて取り調べさせていただくわね」

オバサンが気がかりなことを喋った瞬間、それまで置物と化していたオッサンから殺気が…って速っ！！

オッサンは抜刀しながらメリアへと突っ込んでいく、メリアはそれに気づいて剣を抜こうとしているが、それでは間に合わない。

俺は短剣を抜きつつ、ブースト（魔力放出）でオッサンとメリアの間に割り込み、右手でオッサンの剣の柄を抑え、抜刀しきるのを阻止しつつ、左手でオッサンの首に短剣を宛^{あて}がう。

ちなみにブーストとは体の各所にある魔力孔から一気に魔力を噴出し、瞬発的に体の行動を高速化させることができる魔術もへったくれもない技である。

今の俺の場合、背中と足にある魔力孔から魔力を噴出し、まるでジェットエンジンになったかのように高速移動をしたのだ。

通常、ブーストを使うよりもアクセル（加速化）の方が魔力効率や持続性に長けているのだが、このような場合は面倒な魔術式などが必要のなく気合いで発生できるブーストの方が速い。

そう公社の訓練所で叩き込まれた。

「まあまあ、ゼインが後れを取るなんて、私達も歳かしらねえ？」
「……」

後れだと？ 冗談じゃねーよ。

今の俺とオッサンは拮抗状態にある。

一見、短剣を相手の首に刺せる位置にある俺の方が有利に見えるが、オッサンは俺が短剣を宛がった瞬間に鞘を持っていた手を離し、俺の左手首を掴んでいるのだ。

俺の右手はオッサンの右手を抑え込み剣を抜くのを防ぎ、左手に短剣を持っているが、オッサンに手首を掴まえられビクともしない。

というか、こっちはブーストや補助、強化魔術をフル活用してるのに向こうはそういう類の術を使っていない。

それで拮抗しているとかこのオッサンゴリラか！？ 隠れマツチヨ
か！ 着痩せか！

非常識にもほどがあるぜ。

「ゼイン」

オッサンが俺の腹に蹴りを入れ、その反動でバックステップを踏み、一瞬でオバサンの横まで戻って行った。

とっさに足でガードしたとは言え、結構痛い。

「見た目は旅人にしか見えないのに優秀な護衛ね、あなた。ますます怪しいわねえ」

「……」

こつこつという手合いは下手に話に乗らない方がいい。商人とは違った意味で言質を取られるからだ。

「あらあら、ダンマリなのかしら？」

「な、何をするのだ！！」

「え、えつと館長さん……」

ようやく再起したメリアと仔山羊ちゃんがオバサンに非難を向け

る。

「何って、普通に尋問ですけれど？」

「な!？」

さらりと言ってくれるな、このオバサン。伊達に無法者の集まる冒険者ギルドの館長ではないらしい。

「館長さん!この人達は本当に何も知らないんです!!」

それにこの人達は僕の命の恩人です。彼らに無礼な真似はしないでください!！」

「ここには礼も法もないのですよ。ただ、強い者のみが生き残る。地獄への最前線なのです。

よって如何なる不確定要素も入ってほしくはありません。これはあなたのためでもあるのですよ?」

「ですが…」

仔山羊ちゃんが必死に呼びかけるが、オバサンはそれに応じる気配はない。

強い者が生き残る。それは真理の一つである。特に死と隣り合わせの世界ではこの真理こそが正義として成り立つのだ。

会社のような本当に余裕のある世界ではないとこの真理を打ち負かすことはできない。

俺もこの真理に逆らうような真似はしない。全面的に従うこともないが。

「私は帝国騎士だ。身分も証明できるし、そもそもあなた方に敵対する理由がない」

「生憎ですが、なまじ身分がある人の方が返って危険度が高いのですよ」

「俺は別に疑われていようとあんまり関係ないな。こいつと関わらないようにすればいいのだろう?」

「なら今すぐ地下の特別室でお話を聞かせてもらおうかしら?」

それは酷いものだな。まず間違いなく身体的、精神的に無事では済まされないだろう。

「ま、そうですね。疑わしきものは罰せよといいますが、私は裁判官でもなければ聖職者でもありません。

そうですね、あなた達にちょっとしたお願いを果たしてもらいましょう。それができたのならあなた達への嫌疑はすべて取り払ってもいいですよ?」

「選択権はないってか」

「まあ、人聞きの悪い。ちゃんと選択肢を与えていますでしょう?」

「生か死の選択は選択になってねーよ」

「ふふふ、それでどうします? お受けしますか? それもと…」

わざと語尾を濁らせるところが如何にも性悪な感じなババアだぜ、まったく。

「そんな脅しに騎士である私が平伏すとても…」

「メリア、ここは話を聞こう」

「オーミ！ お前はそんなに気が小さい男だったん……っ！？」

やっと気づいたか。今この部屋にいるのはいけすかないオッサンとオバサンだけじゃない。

いつの間に入ってきたのか、それとも元々部屋の中で隠れていたのかは知らないが、黒い服装をした人間が俺とメリアの周りを取り囲んでいた。

「『鳥』…」

「あら、初見ではないのね。騎士さん」

あとで聞いた話だが『鳥』とは暗殺を生業とする砂漠の民のこと。よく王族や貴族の命を狙うことが多く、騎士であるメリア達とは因縁の仲であるとのことだ。

俺はそんなことは知るはずもない立場なのだがこいつらから感じられる気配からそのような類のものであると認知した。

「多勢に無勢。逃げようとしてもメツですよ？」

「なにがメツだ。目ん玉でもくり抜くつもりか」

「場合によってはそうなるかもしれないわねえ」

何にしても認識操作がある俺はともかくメリアはこの状況を脱するのは難しいだろう。仕方がない。

「話は聞く。だがこれはあくまでも交渉だ。あんたらにも約定はしつかり守らせるからな」

「あらあらこの期に及んでそんな口が利けるなんて余程の大物なのかしら？ 期待してもよくて？」

「御託はいいからさっさと依頼の内容を教えろよ。館長さん」

「あらあら、せっかちなのね。旅人さん」

第九話（後書き）

やっとのことブリクトです。

これからは冒険ファンタジーにふさわしい展開を期待したいです。

…まあ、それを書くのは私なわけですが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2496j/>

俺の無意義な異世界雑務

2011年11月16日21時47分発行